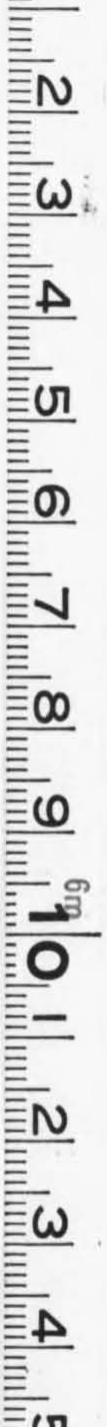


特264

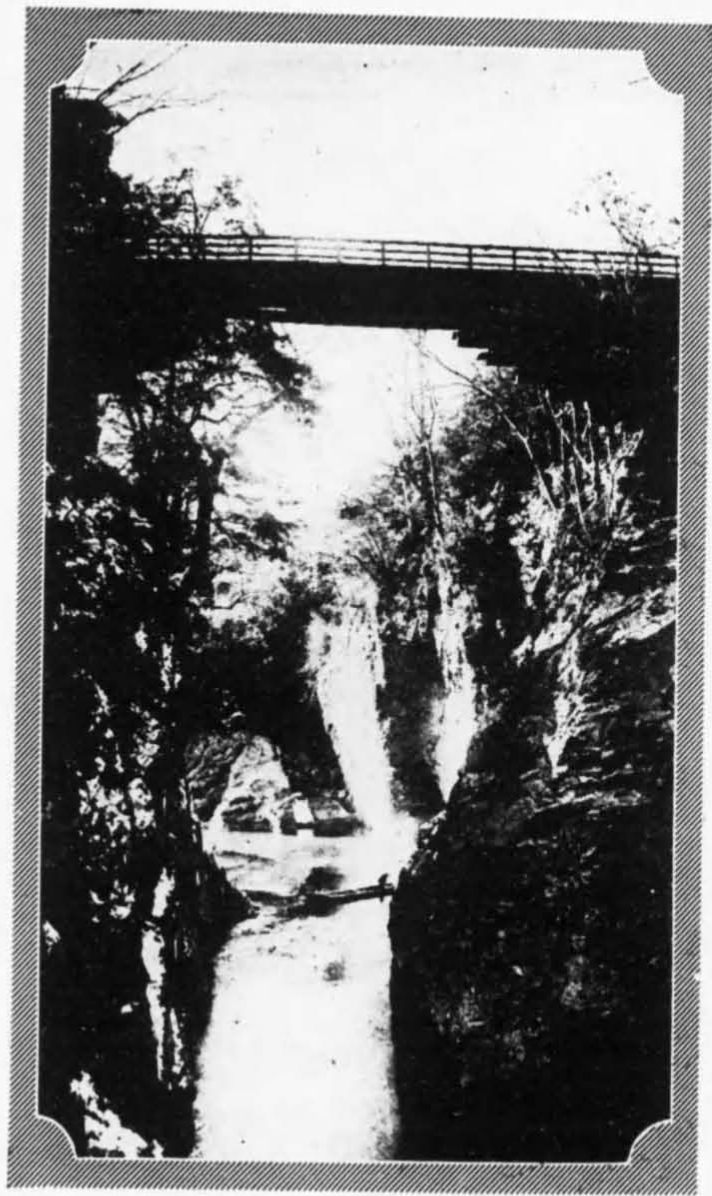
892

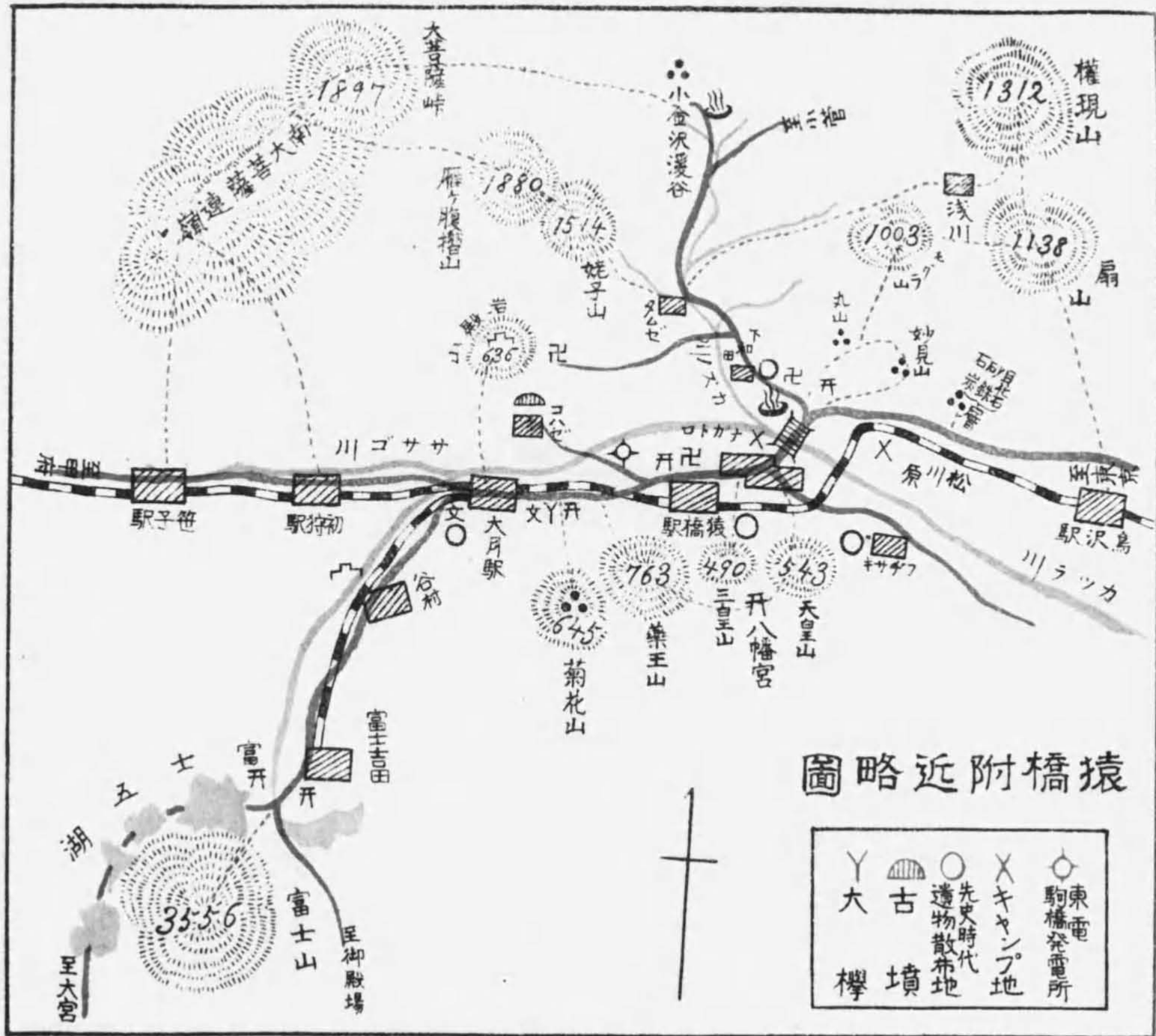
甲斐之猿橋

始



特 264
892





猿橋附近略圖

Y	古	○	X	○
大	墳	遺物	キャンプ	東電
欒	地	散布	地	駒橋
		地		発電
		地		所

名勝 甲斐の猿橋と其附近

山梨縣史蹟名勝
天然紀念物調査委員

仁 科 義 男 編

一、桂川の段丘と人文との交渉

中央線與瀬附近より段々西するに及び、電車の路に沿ひて聚落地となり、耕種地となれる平坦の土地を車窓から眺むるであらう。其の南には北側の山岸に桂川が谷深く恰もコロラド河のカニオンの如くに穿ちて所謂峽谷の狀をなしてゐる



猿橋の峽谷

此の平坦の土地は、耕種地桂川の河成段丘で武相方面から甲州え文化の輸入に大なる便宜となつたもので、其最も著

しいのは上野原の台地及猿橋、大月間の平坦地なので、現在茲に上野原町や猿橋町や大月町などの聚落があるが、先史時代の人々は數千年前に、お先きに茲え居を構



へたと見へ、其の遺蹟は顯著なものがあつた。二つの川が合流する地點、例へば桂川と鶴川との合流點に於ける上野原、桂川と葛野川との合流點に於ける猿橋附近、桂川と笹子川の合流點たる大月町附近、それから下流で桂川と道志川の合流點たる津久井郡三ヶ木村字内郷附近等々が先史時代から現代に至るまで立派な人間集散の巷となり、地人相關の理を如實に物語つてゐると云ふべきである。

二、都留郡の上代文化

萬葉集の東歌に

むろがやの都留の堤のなりぬがに

ころはいえどもいまだねなくに。

と詠れたのも此猿橋のある本郡に因めるものであつた。其後かの古今集の撰者たりし壬生忠岑か友人であつた甲斐の小目凡河内躬恒の許に來遊されるときにでも詠れたものであらう。

君が爲いのち甲斐にぞ我は行く

つるの郡りに千代はうるなり。

又

甲斐の國つるの郡りの板野いたやなる

しらたま小菅傘にぬいてん。

とも詠れてゐる。此板野とは本郡小菅村附近の古名である。本郡が既に奈良朝千餘年の昔より、都の文人、學者、學者の間を意識されたのである。

當時文化高き支配階級の人達が盛んに來往居住されたることは、段丘台地の此所彼所に石槨式奥津城の遺存されてゐ



繩文式土器
近所か、丸い、たれ

ることによりて觀察が出来る。尙又、猿橋の峡谷を中心としたる文化が既に有史以前彼の繩

文式又は彌生式文化の形態に於て隆盛を極めたりし事實も歴然たるものがある。現今南北兩岸の第一段丘の台地や平坦地から彼等の住居跡や石器や土器が發掘されるのである。

三、猿橋と其峡谷の特徴

木曾の棧橋、周防の錦帯橋と共に日本三奇橋と云はれ（或ハ云、周防ノ算橋、甲



橋 猿 舊

斐ノ猿橋、阿波ノ蔓橋、又ハ周防ノ算橋、甲斐ノ猿橋、越中ノ愛本橋ヲ三奇橋ト呼ブ向モアルガ編者ハ賛

セズ）長さ十七

間、幅三間、水

面までの高十七

間、昔しは橋下の水深も亦十七間と云はれた、關東方面より治府所在地である甲府盆地に通ずる要路に架つていて（所謂國道八號線）徳川氏が幕府を開いてより以後は彼の御坂峠より富士山の東麓を通つた古官道（鎌倉往還）の繁榮は全然之れに移り、明治となつて四民の往復益々忙しくなり、所謂甲州街道の名が中仙道、東海道と並稱される様にな



圖 造 構 の 橋 猿 舊

つた。此の猿橋の名は既に今より七百餘年を遡る嘉祿二年の文言や、鎌倉大草紙の應永三十三年頃の記事にも見へている。

古來の傳説に、太古白猿が藤蔓を傳ひて對岸に渡るのを見て初めて此處に架橋の工を起したものであると云ふ。故に猿橋と名付けたりと云はれてきた。又一説には

推古天皇の二十年百濟の歸化人志羅呼と云へる巨匠が長橋を架設するに妙を得てゐるので、時の朝廷より命を受け、三河の八脛ノ橋、信濃の水内ノ曲橋、遠江の濱名ノ橋、陸奥の圍川橋、並に此猿橋を架たとされている。

其の構造は頗る奇抜で、一本もの支柱を使用していない所謂跳橋の形式を採つたものである。橋下の峡谷は即ち

桂川斷層線によりて生成されたもので、今尙斷層面と同方向の節理が橋下上方の川底に認めることが出来る、

南岸の洪積層上は太古富士山噴出最初の熔岩流に覆はれて厚さ凡八米計り特有の柱狀節理を成し、地理學者は猿橋熔岩流と稱して有名なものになつてゐる。



面 層 斷 の 流 岩 熔 橋 猿

のになつてゐる。

四、峡谷の植物

第三紀の堅硬な岩盤の裂目に千古の老樹が根張り強く繁茂して、懸崖の上には千草が一面に生えて景趣を添へている。既に風致保安林として保護されているが、いま是等の草木を植物學的な分類をしてみると、木本類約三十種、草本類約百種、隱花植物約二十種を數へることができ、之を四季の景趣に振分けてみると。

春ノ部

ヤマザクラ、フジ、ウツギ、ヤマブキ、ツ、ジ
ツバキ、ユキヤナギ、ムラサキ、ケマン
シユンラン等

夏ノ部

ネムノキ、ノイバラ、カナツ、ギ、コマツナギ、コマメ
ウツキ、カハラナテシコ、ツリフネソウ、オホバマツヨ
イダサ、カハラケツメイ、ツユグサ、ヤブカンゾウ、ス
ヒカツラ、メドハキ、ユウガギク等

秋ノ部

カエデ、ハギ、クズ、コマユミ、ニシキギ、ガマズミ、
キハギ、ムラサキシキブ、カウゾ、コンギク、ノヂギク
ス、キ、ヒガンバナ、ツタ、ヤクシソウ等

冬ノ部

アラガシ、カヤ、アオキ、ユウヅタ、ゼニカツラ、マメ
ヅタ、オホバジヤノヒゲ、ノキシソブ、ヤノネシダ、ヤ
マコウバシ等

(石塚末吉氏調査)

五、附近の遺蹟や名所

町の南方の台地(第一段丘)である梨木、伊良原より東方に連続したる藤崎方面からは先史時代(石器時代)民族の製作使用にかゝる縄紋式又は彌生式の土、石器が發掘されている。又北岸台地(第一段丘)なる心月寺境内も同様な遺蹟地である。

橋を互りて東京方面に向つて四五丁にして左



蛇骨の化石

方の小溪を蛇骨澤と稱し、玆には第三期末の貝化石（巻貝、二枚貝、主トシテ大ガキ）が厚一米突出の層をなして露出している。其の手に並行して石炭層、砂鐵層が露出しているなど地質や地形、礦物學上頗る参考となるべき所である。

出世大神宮



（月太の祟安 物賣宮神人世出）

橋の北岸台地にある森は境内で、近郷に於ける男兒出世の祈願所として名高い社であつて、昔年本社社頭に於て靈夢に感し、徳川氏の旗本と



櫻糸ご樓鏡寺月心

なり、出世榮達したる山口出雲守直承奉獻の伯耆安綱太刀並に日光廟造營紀念の金銅製長柄の銚子一對等の寶物がある。

孤圓山心月禪寺

出世大神宮境内に連續したる地域で、開山は宋國永嘉郡の人、大休佛源禪師と申し、建長寺開山蘭溪大覺禪師と同伴にして、本朝二十四流の一賢と云はれた名僧である。建長寺末本尊藥師如來正安元年勸請（六百三十五年前）曾て佛源禪師諸國遊化の途橋畔なる猿猴探月の破庵に止まり、後止應二年十二月晦日寂せりと云ふ。寺は昔橋南に在りしが、明和の頃現在の所に移動したもので、境内老櫻茂り、花時爛漫秋は四周の紅葉に眼も奪はれんばかりである。

丸山公園と山嶺遊覽道

心月寺境内の裏手からも、大神宮境内からも直ちに老松の林間を登ること二三丁にして丸山の頂きに達する、玆に乃木將軍揮毫の莊嚴なる忠魂碑が建られてある。四圍の林間には山吹、ツ、チ、藤等が密生して、春期のハイキングに好適の所である。展望極めて廣潤、大菩薩連嶺を西天に、東南には道志山塊の勇姿を眺むるなど誠に景勝の地と云ふべきである。近時此處及大神宮境内より山嶺の林間に松籟を聞つゝ東方に到れば、僅かにして



丸山招勇碑

巨岩の相重なりたるが上に石祠を祀れる妙見山に達することが出来る。此處の展望丸山に劣らず足下に桂川の清流を眺め、百藏、扇、等郡中の峻峯を指呼の間に望見するなど猿橋の探勝地と併せて一日の清遊に最適と云ふべきである。

百藏山麓扇ヶ丘

丸山から北方え雑木林や松樹の間を縫ふて二十分程にして扇ヶ丘の芝生に出る。鼓は緩傾斜の廣々とした西南面の所で、前方の雲際には富岳の靈峯が幾重もの群嶺を壓して、秀麗なる姿態を見せ、前景には針葉樹の黒き山裾が、恰も扇を開きたるが如き景觀を呈したるところ、即ち其の地名の來るところである。之れより百藏山頂まで約三十分、富士見台まで十分、東京より日歸りハイキングに好適である。



百藏山富士見台

殿上祖師堂と彈誓上人の遺跡

猿橋の驛に下車して町に來る途中左側に一大堂宇がある。曾つて文永六年中、日

蓮聖人甲州巡錫の途この草庵に止り、

里人を教化したと傳へられ、寺寶に聖人御眞筆の大蔓茶羅並に六老僧の一人日法上人自作の日蓮像を安置す。

此の聖像は上人が一木三躰を彫成したるもので、其の一躰は房州小湊誕生寺に、他の一躰は東京府下堀の内妙法寺の寺寶として今に現存すると云ふ。



日蓮上人の宿の跡

又彈誓上人の禪窟と云ふのが宿の西はずれにある。附近の阿彌陀寺は上人の遺跡である。

明治大帝御召換所跡

明治十三年六月山梨、三重、京都御巡幸の際、同月十八日御召換所となりたる處なり。

即ち鳥澤行在所（井上清武宅）に御晝餐を召されたる 陛下には當時、猿橋の南畔に在りし警察署に暫し御小憩遊され、奇橋とその峽谷の麗しさを御賞觀あらせら

れたるなり。

郡内三山

近年中央の山岳愛好家にも知れて来た、権現(一、三一二)扇(一、一三八)百藏(一、〇〇三)の三山の縦走も猿橋驛で下車して登高することが至極便利であらう。

1、権現山往復

猿橋↓一時間(自動車十五分二十錢)↓田無瀬↓一時間弱↓瀬戸↓一時間↓浅川部落出口↓三時間↓頂上↓三時間↓田無瀬↓一時間↓猿橋驛。

2、権現より扇へ

権現頂上↓一時間半↓九八〇米附近峠↓一時間↓扇山頂上↓二時間↓鳥澤驛。

3、扇より権現へ

猿橋↓宮谷↓三時間↓扇山頂上↓二時間半↓権現



天皇御所跡の遺蹟

頂上↓(1参照)↓猿橋驛。

又は(2参照)鳥澤驛。

4、三山縦走

猿橋↓(1、2参照)権現↓扇↓二時間↓百藏山
頂↓二時間↓猿橋驛。

三皇山と天皇山



猿橋町より扇山を望む

町の西南にあたつて約二百米許りの標高をもつ、山上に三皇神社の社があり、眼下に全町を俯瞰し、前に百藏扇、権現の槽峯を眺め、西の間近に岩殿山の城址を又遙かに南大菩薩の連嶺を一眸の裡におさめ、足下に桂川、葛野川の清流を望みたる誠に四季景勝の所で、近時登山道を改修し、四阿、運動遊戯の設備、ベンチの設け等小遊園地としての設備が完成されてゐる。

天皇山は町の南にありて前記三皇山より幾分標高高き小山にして頂に近く天皇社

を祀り、毎年舊暦六月一日の夜、町の青年男女、子供達は必ず各自「一本の瓜」を持参して参籠し、明朝まで打興じて下山し、その日各家共ヒチキ（海草）を炊いて食用に供するのであるが、之れに依つて夏中腹の病に罹らぬと古來信仰されてゐるのである。此の夜祭りは縣下に誠に珍らしき年中行事の一つにして、彼の歌垣の變形したる一種の土俗であるかと考えられるのである。

四時の眺望は三皇山に劣らぬものがあり茲より幡野八幡社を経て、小澤部落から駒橋薬王山に至る山道は一日のハイキングコースとして好適と云ふべきである。



景全の町橋駒

大菩薩驛峠

介山氏の筆に依て天下の名山となつた此の峠は、猿橋驛から自動車にて七保村まで（十五分二十銭）行き、それより葛野川の清流に沿ふて約四時間、途上の平將門一族の遺跡や峽谷美を満喫しつつ、小金澤幽谷の關門及大菩薩峠の登口である深城に

達する。茲から溪谷道と山嶺道との隨意なコースを取ることが出来る。（詳細は大

菩薩案内参照）

岩殿山城跡

戦國時代には關東の三名城の一つと讃えられた程の要害堅固なもので、小山田氏累代の居城であつた。猿橋驛から西五六町駒橋より麓の強瀬村を經る表口登山道と驛から猿橋を渡り葛野川に沿ふて（山麓對岸マデ自動車便アリ）岩殿部落に到り七社権現に詣（大月驛ヨリモ好適ナ順路ガアル）



近附峠驛岩大

で、登る東口とがある。（ル）

岩殿山略縁起

（阿部完堂作）
（北條和樂氏所藏）

抑當山の濫觴を案するに大同年中行基菩薩關東へ斗檄



打望を山殿岩りよ備儀

のおりから圖らずも岩殿の名山たるを喜び長く此にとふりうまし／＼七躰の尊佛並に十一面觀世音を御手すから彫刻せられ、七躰の御佛は山の岩窟に堂を掲て安置し奉り國家鎮講の靈場となし給ふ。斯岩窟の中に佛殿を建立せしより岩殿の名は起るとなり、就中其十一面觀世音は一刀三禮にて刻まれしものにて靈驗殊に著しく當山の本地佛にして甲州札所の一ヶ所也三層の浮圖は承平三年に若狭の人孝阿禪尼の建立したる事棟札に記ありて歴然たり禪尼は世に若狭の八百比丘尼と稱して八百歳の齡を保ちし女性にて當社の靈驗を深く仰ぎ此山に艸庵をむすぶ事玄公の御再建なり抑々七社權現と申したてまつるは、山王、白山、熊野、日光、伊豆、箱根、藏王にして御立像をの／＼長さ七尺ばかり大同元年より今に至る千有餘



七社權現御像

年久し渴仰のあまりに寶塔を奉獻す今にその庵の跡を比丘尼屋敷と申し傳へて雙生の古松碧書を凌げり中宮は麓より八町躰りて誠に巖々たる一塊の岩山にてその高さも雲に接はる七社の御堂は十一間ありて窟の中に是れを建てり、御本社は武田信

年朽す損せず御姿古雅なること恐らくは儼まれなるべし此山中古武田家の屬城になりし頃七社權現を御城の守護神とす天正年中、織田信長公甲州へ亂入の時に小山田信茂當城の城代として信長公に貳心をかまへ、主君勝頼を滅し其身も神靈の御罰を蒙り忽滅亡をまねけり。今も頂上に當時の井戸あり誠に寒冷なる清水にて常に溢れたゆる事なし是れ當山八景のその一也。底に新宮とて大なる巖穴え千手觀世音を安置せり。

背見瀑ありて最清淨の靈區なりこれを坂東三十三番、秩父三十四番巡拜所とす傳ふる所の大般若經は康暦の年左兵衛督源氏滿公御奉納にて當社第一の寶物なり、當御代へも恒例として御祈禱札を奉りしにより忝くも秀忠公御眞筆の御褒詞を賜れりその外當山の寶物は事繁ければ此に贅せず。

ありがたきこの岩殿の神屋しろ

世々に朽せぬ契りありとは

ほととぎす尾上の松の坂をとし

道興

芭蕉

岩殿山八景

猿橋の秋月。

麓の晚鐘。

頂上の井戸。

新宮の瀑布。

畑倉の夜雨。

大月の落雁。

葛川の漁火。

鏡岩の夕照。



大月遊覧園の石上代時器

南麓の大月町には有名な先史時代の遺跡があり、茲より富士山麓電気鐵道によりて五湖遊覧の便もあり、附近郷社三島神社境内には内務大臣指定の大櫓がある。

根廻り 四十二尺

目通り 三十四尺

尙此の他に三本の大櫓があつたが既に枯死して其跡に

石を立てゝある。

一、安政五年枯死

周圍

四十五尺

二、萬延元年枯死

同

四十三尺

三、明治七年枯死

同

四十七尺

桂川の鮎漁とキャンピング

その味はひ玉川より優位にあると云ふ桂川の鮎は、近年橋下の東西數丁に亘る流域を鵜飼の禁漁となし、沿岸には數ヶ所に杉皮葺の風雅な四阿を設けて釣遊者の利便を計り、貸船の設備もあつて、橋下の遊覧、團体的な鵜飼宴會などにも好適である。

長瀬附近の河畔に於ける芝原や、松川原の林間はキャンピング場として最適地である。



橋下遊覧の寬船

六、文藝にもされたる猿橋

猿橋と云ふ名詞が書記されたのは、既に嘉祿二年、應永三十三年等の古文書に見ることは出来るが、文人の筆になりしは彼の廻國雜記の筆者である准后道興が文明

十九年頃（四百四十八年前）此地に來遊せられ、その手記にみへる詩歌を以て最初のものと言へよう。

廻國雜記に



西園のヤシンゲン

猿橋とて川の底千尋に及び侍るうへに三十餘丈の橋を渡しはべりけり、此橋に種々の説あり、昔し猿の渡しけるなぞ里人の申侍りき、さることありけるにや信用し難し、此の橋の朽損の時はいづれも國中の猿飼ども來り集りて勸進なぞして渡し侍るとなん、しからば其の由緒も侍ることある所から奇妙なる境地なり。

名のみして叫ぶもきかぬ猿橋の

下にこたふる山川の聲



桂川の熱湯

谷ふかきそはの巖の猿橋は

人も梢をわたるとぞみる

水の月なほ手にうとき猿橋や

谷は千尋のがけの川瀬に

この所の風景、更に凡景にあらず頗る神仙逍遙の地と覺え侍る。

雲霞漢々渡長梯

四顧山川眼易迷

吟歩誤令疑入峽

溪隈殘月斷猿啼

又寶永三年九月柳澤吉保に聘用せられたる儒者物茂卿が入峽の折竝に宿し同行の田省吾と供に詩作が遺されてゐる。

物徂徠の峽中紀行は此橋に頗る細密なる叙述がされてある。依つて此處に之を掲げる。



橋下西園の景

店主人亦來遊、相語是猿王所架、長十一丈、達水際三十三尋、而水深亦三十三尋

則命儻跳身欄外、而左手據欄、右手垂炬倒照、從旁下瞰黑深、火力短不及、儻益
俛伸其臂、遂致火焰逆上欲燒手、輒遽棄、墜至水際迺滅、予緣是得目送及其夫滅
而觀彷彿也、皆如其言、橋下無一柱、從兩岸累鉅材架、起上者必出下者外尺許、
愈累愈出、以得相近、而橋之誠神造也、崖光滑無縫罅、如刻立然、土人云崖腹有
釜、神蛇穴焉、歲旱民聚汲渴其釜中水、蛇見則雨、驛問何得玉釜處、迺云、土人
生于土長于水、雖東其手足投橋不死、聞者皆吐舌、又問崖石如無縫豈苔滑使然歟
云連一驛百家、在一片石上、則是川亦大石渠耳、益駭異聞、遂宿于驛、

徂徠が宿泊した幡野家には容姿端麗な寡婦ありしが、親戚の勸むる再婚をも肯せず
守節七年にもなり、而かも其子供の教育あるを奇として猿橋五奇の文中に草し、雪
翁は詩を賦してその子に與へられてゐる。後明和七年瀧鶴臺が來遊せられて該書卷
に跋文を掲げてある。左に之を採録してみよう。

猿橋五奇界旗野氏之子

予過猿橋驛、々西有橋、長十丈、高六十六尋、無有橋柱、兩岸參鉅材架起、相傳
昔有猿王、剽造誠國中奇觀也、橋下岸崖、有窟穴、歲旱土人、以窟中水、則大
蛇見、乃雨、亦可爲奇也、驛戶百餘、南北相對、長二町許、下唯一片石已、是最

爲奇矣、土俗、婦人夫亡則、就其家、納它夫、婚以幹家事、驛長幡楚妻、獨曰、
有後夫則、不得無子、有子則如前夫之子何、遂守節七年于今、是倫綱之常、何足
爲奇、然世道益誼、罕見節婦、則可謂奇也、予此回、祇役往還、諸名利、僧皆癡
羊、話不及文字、獨孀婦之子、能就予乞字、是又不轉奇乎、故書道中奇以界、

右猿橋五奇

物 徂 徠

丙戌九月、祇役赴甲陽、路宿猿橋郵長家、聞其母寡居七年、不爲親族奪志、教育
惟謹、余嘆嗟之餘、作詩與其子云、

駐馬猿橋遊兩回、橋西驛舍傍流開、最憐郵長一孀婦、守節七年心已灰、

雪 翁

明和庚寅夏六月、余西歸、道峽經猿橋驛、里長幡野英積者、出迎道左、請入少憩、
乃捧出物先生手書五奇說、并花崎大月一聯、及雪翁詩、雪翁者蓋田省吾別號也、
醫師小宮山甫安氏在座、語曰此物先生所賜也、主人每恐百年之後或失守、或蠹敗
還造化、是以欲撲刻墨以爲其副、且以廣傳於海內於無窮也、嘗聞先生名、待其時
也久矣、今日幸蒙一臨、冀乞一言以題墨本後、以所信於後世也、余謂當今物子之
蹟、雖於都下、亦難得焉、雪翁書、亦所希觀、而今猶在家、五奇可六、謗劣如余、

遠聞其名待其來、得適其願、可謂奇之又奇者矣。因譚題其後、主人則節寡婦之孫云、
樸實謹厚有節婦之風、

時余患眼、不能操筆、而其奇不可已、已投宿於初雁驛、後力疾拜書、

長門後學瀧長愷

號 鶴 臺

徠翁幡埜氏節婦、是倫綱之常、何足爲奇、但世俗罕見、則亦可謂奇、夫人情歷常
而喜奇、慣奇則亦不奇、猿橋之製誠奇矣、而既有形則可摸倣、防之算盤橋、蓋摸
倣之者、而長數倍之、矧方今寰宇、橋之奇者何限、鐵木架空、亘數十里、何區々
損橋之足稱哉、但三綱五倫、人視以爲常者、天下罕能之、故奇不足爲奇、唯常以
爲奇、幡野氏之婦、山邨一女子耳、數百歲之後、其行膾炙人口、碩儒名家、咨嗟
詠歎、弗措、是豈非真奇者邪、

明治丙戌孟春

書猿橋五奇書卷後

成齊重埜安繹

鹿 門

癸未蒨月下浣書于山梨逆旅

甲斐幡埜氏、藏物徠紀猿橋五奇橫卷、曰橋製奇巧、曰蛇見乃雨、曰地底磐石、
曰幡野氏孀婦、曰幡野氏請字余所以爲太奇而服徠氏第四爲然其言曰夫死守節不

足爲奇唯士俗無守節者、幡野氏一人守節、是爲奇、此言非氏、不道德、

過猿橋有感

青邨處士廣瀨範

駛水漚成潭、峭崖突相逼、漉々一條鳴、黝々萬象黑、飛橋架空冥、長虹橫巖、
結構費人工、規模奪化力、徠翁筆入神、記成精妙極、紙價爲之騰、柳州有怯色、
予亦企前賢、苦吟倚欄立、脫波聞躍魚、投樹見成翼、上馬就征途、天寒烏帽仄、
前驛夕雲西、舉鞭指山肋、

猿橋爲幡野君

枕 山 叟

奇製寰中莫與齊、橋跟一見一低迷、深潭絕底難施柱、高岸乘空類掛梯、
隱德豈唯通雨蟻、化工而後現晴霓、秋深轉覺有猿趣、紅樹白雲東接西、
南岸的橋際に、寶曆五年十月建設の猿橋碑がある。撰文は鳴鳳卿、篆額は關思恭、
書は佐久間東川の筆になるもので左に全文を掲げる。

猿 橋 碑

我大日橋梁之奇巧者、三防之算橋、岐嶺之棧橋、峽之猿橋是也、峽也、山嶽列峙、
險巖嵒比、逞々斗絕、不可徑矣、比諸蜀門陳倉之阨、不易焉、在昔方永祿天正之
間、武田氏負險城峽、其耽耽闢以東傑驚者、有以夫、傳曰、洪荒之間、有猿王、

跳而抱葛藟、攀緣過斷崖、古之智者視而做是、偃巨木於兩崖、重以架澗、結構成橋、人蹟始通矣也、爾來工人範之、製亦因加焉、猿之神、工之智、天工之代、至今鎮臺士女、雉兔芻蕘、及行商之通有亡者、亡不皆臻焉、峽之土填、厥田中厥賦上、宜稻粱、厥山出金、厥婦女善蠶織、厥菓榲梨橘柚柿栗、亡海運、凡百物貨、駝而出之、厥利巨巨萬、峽民之爲生、惟其猿橋是賴、或曰、昔者推古帝時、百濟人志羅呼者、適來過此、見于猿王緣藤蔓而爲涉、於是乎翫造橋也、未知孰是、蓋觀蓬而製車、見浮葉而爲舟、古之智者、皆爾、余嘗聞之峽人、猿橋之壑而絕、桂川不盡、篠子葛川諸水、會同于此、深亶迅不可測矣、橋凡廣丈餘、袤二十餘步、不柱、如複道、厥製甚妙、橋下四十有仞而後有水、雲霧杳冥、故俯臨者眩不克正視也、是迺峽之奇觀焉已、石夷庚、宇山之、世峽人而好文辭、乃以狀謁余曰、峽吾父母之國也、每夢寢厥山川、意斯猿橋而亡誌、孰知厥所由、且夫古之人、利物成功、恬乎亡聞邪、奇事夫有沒邪、請得子之文、以傍諸不朽也、則立碑於猿橋心月寺境、蓋顯父母之國也、會辭不敏、不許、遂受厥狀閱之、則殆如曩者所聞、作爲碑文、繫之以銘、銘曰、

二儀之判、天地定位、成山成河、不藉人爲、蓋此斷崖、途殫濟難、神矣猿王、

跳緣葛藟、智人範之、危橋是始、千載興利、工也何奇、斯之隘陬、萬水所歸、
旬確注澗、神魂俱飛、一橋既成、萬類承禩、
寶曆五年乙亥冬十月十五日

東都

錦江 鳴鳳 卿撰

鳳岡 關思恭篆額

東川 平茂之書

筠齊 石川夷庚立

甲陽

碑側にある小祠は橋掛山王宮の社で、白猿の像を祀る。夏の祭りには町の若者此像を昇ぎ各戸に臨み神事を行ふ様全く天下の奇觀である。又祠の裏に碑あり。
枯枝に鴉のとまりけり秋の暮
芭蕉

芭蕉

表に うきわれをさびしがらせそ閑古鳥

側に ひと聲は山彦にかへて不如歸

過 猿橋

埴科 嵐窓

山河奇極却蕭條

况復霏々雨雪飄

嶋地 默雷

峭壁巉崖孤驛路

過猿橋

夜猿啼裡渡寒橋

宋州

孤驛蕭條秋色饒
明時棧道崎嶇險

水飛山走暮雲跳
何科陳倉有此橋

野村素軒

一條虹勢欲凌虛
橋上兒童爲底事

杳々深崖水似渠
垂綸千尺釣香魚

田雪翁

駐馬猿橋遊兩回
最憐鄭長一孀婦

橋西驛舍傍流開
守節七年心已灰

全人

猿橋佳境四方傳
曾想虬龍臥波勢

今日來看忽愕然
藤蘿蔓着架雲邊

此の田雪翁と云ふのは田中省吾と云ふ詩人で字は宗魯、雲華道人と號し、徂徠の詩友で晩年姓を富、字を春叟と號し、又桐江と更め京都に遊ぶ、所謂る富山人とは此

人で、其著に東海漫遊稿、樵滑餘滴等がある。

長梁無脚渠空通
幾度憑欄眩心目

石壁巉巖琢鬼工
王隊叱馭若爲雄

乙事耐軒

白猿橋畔白猿啼
隔水樵家皆倚石

劍閣懸崖雲欲底
極天鳥道獨臨溪

服部南郭

公孫躡馬雄圖古
雙淚非關巨峽恨

張載題銘客跡迷
心中萬事自悽々

總之大龍翁心入

嶮崖盤屈古藤條
探月胡孫靈感地

運濟往來道愈喬
扶桑國裡最初橋

廣瀬青邨

駛水匯成潭、
飛橋架空冥、

峭崖突相逼、
長虹橫嶺前、

漉々一條鳴、
結構費人工、

黝々萬象黑、
規模奪化力、

徠翁單入神、

記成精妙極、

紙價爲之騰、

柳洲有怯色、

予亦企前賢、

苦吟倚欄立、

脫波聞躍魚、

投樹見歸翼、

上馬就征途、

天寒烏帽仄、

前驛夕雲西、

舉鞭指山肋、

兩岸峙無底、

上排一飛虹、

我醉聊長嘯、

渡邊方壺

鷺音在半空、

森島桂園

路連溪澗白猿橋、

兩岸翠屏烟欲消、

吟步誤疑緣樹杪、

千尋深碧水蕭々、

諸角一庵

落日深潭桂水長、

白猿橋上雨蒼茫、

山鳴谷應秋風響、

不是三聲亦斷腸、

小野蘭甫

架峽長橋幾歲成、

奇功自古費論評、

千尋蟠竦澗中飲、

百丈虬龍雲外橫、

阿部完堂

始驗猿工奮鬼工、

長梯百尺跨溪通、

驟看先謂龍橫水、

久視翻疑人渡虹、

懸壁生雲危欲眩、

激湍噴雪響將聾、

要驅鳥鵲過銀漢、

小住橋頭夜月中、

三島中洲

偶然遊鶴郡、

最是愛猿橋、

對立崖千尺、

不看溪水走、

唯聽石湍聲、

幽絕景難寫、

宿猿橋北條氏吞江樓々扁徂徠書

交加樹萬條、

麟公脩道深山裏之句因及之

躊躇筆欲燒、

眼裏浮榮悲俗態、

麟公脩道愛深山、

我來重宿高樓上、

響枕溪流一味閑、

東正堂

石壁中開飲溪流、

隔崖連嶽壓頭浮、

猿橋風景已非古、

猶有雄心起我儔、

東正堂

記 猿橋五奇

阿部完堂

隆隆架於桂川者，曰猿橋，相傳，太古猿援藤蔓，踰此斷崖，人視而構思，剗造飛橋，至今橋有改作，則必有白猿而現焉，橋長十丈，高三十三尋，宛如虹之跨澗，其下兩崖漸逼，斷間三丈，潭碧淵渟，深亦三十三尋，是猿橋之所以爲奇者，橋下崖腹，豁然有穴，如釜水滿焉，俗曰御釜，天旱波之輒雨，不知何故，可爲奇矣，北岸有巖，跋扈水中，曰一丈岩，望之與水平，而高丈矣，是奪人目者，亦奇，稍西有風穴，常吐噫氣，風穴當在山岫，而在澗底，以故爲奇，馬蹄石在橋東，石有圓穴，如馬蹄，穿之形摸宛然，真奇石也，是皆土人所稱五奇，與徠翁所記頗異，蓋其奇雖非識者之所取，適足以粧飾猿橋之勝矣，故記以與土人，

猿橋

川本衡山(貞輔)

猿橋之奇天下寡，
百尺長橋通萬馬，
架成全如糊粘紙，
衆木攢插均輕重，
兩崖抵氏卅三尋，

穹隆跨水如覆瓦，
崖石溫柯殆傾危，
金繩鐵索一不施，
造舟爲梁計本迂，
水面抵底又復深，

不假寸木橋柱懸，
精銳堅不容鑿錐，
大者數圍小者拱，
揮斧生風令人悚，
攀欄匍匐瞰凝碧，

心悸股慄自難禁，
一字不揭匠師名，
絕藝如斯奪化工，

恨不緹崖爲仰見，
感歎昔人不自銜，
願將此巧才作軍器，

猿橋

巢園 遠藤隆吉

猿王剗造奪天工，
飄々人行裡雲霧，

長虹乍見橫大空，
滿山涼氣滿身中，

猿橋驛

物 茂 卿

爭傳花果洞中事，
楚猴冠來人自喜，

却駭色橋百尺長，
不知窮谷有猿王，

猿橋

正 堵 適 新

雲埋老樹雲容變，
誰識行人斷腸恨，

水拍奇巖水勢驕，
一簑寒雨渡猿橋，

曉過猿橋

市 川 米 庵

行過山橋曉靄迷，
一痕殘月千峰碧，

峴高百仞枕深溪，
數叫猿聲不耐悽，

猿橋記

二松學舍教授 佐倉 達山

甲陽桂川發源於岳麓山中湖、貫流南北鶴兩郡、以注於湘洋、水清而勢駛、有橋曰猿橋、長十丈、高三十餘尋、無有橋柱、兩岸積鉅材架之、形似虹蜺、兩崖屹立如斧削、老樹蔭翳、水流其底、矯々如龍走、瞰則眼眩脚戰、難久留、世人與周防之算橋、木曾之緬橋並稱爲我邦三橋、昔物茂卿駐馬賦此景、詞藻奇絕驚人、自是橋益著世云、今茲庚子、我縣廳命工新之、六月起工、以今日落之、就而視之、材質堅牢而規模亦不遜舊、自今十數年間、可復無朽陷之患矣、惟橋雖不甚長大、兩岸臨於不測、結構奇異、是以經營涉久、而其費亦超過於所期、蓋亦勢之所不免也、夫此地當峽中第一之道路、行旅運輸者皆由以通焉、是以一朝此橋則、交通忽杜絕、兩岸相視而不啻相近、殆如天塹然、今此橋成則、雖有霖潦氾濫、不敢覺痛痒、是亦此橋之所特有也、因憶、方今橋之大者何限、或鉄柱架空、或石壁穹隆、唯恐不盡其美觀、而此橋獨不改舊制者、雖近迂括、亦不無說焉、凡人之情喜新厭舊、甚則全廢固有之美而不顧者往々有焉、獨此橋不求奇而自奇、無復苦心以競奇之要、故存古態、永使行客徵古以觀今、是所謂一舉兩得者、噫豈不亦昭代之美舉乎哉、是爲記、

明治三十三年九月二十三日

猿橋

達山 佐倉孫撰并書

桂水 幡野弘毅

長流噴雪遶峒門、

絕壁摩空擁澗村、

老樹攀飛猿假智、

危橋架得客驚魂、

昔時碩學文章在、

後代名工繪畫存、

明治天皇駐蹕地、

教人千載仰鴻恩、

庚寅秋日過甲之猿橋時霖雨連旬崩頽

桂水幡野君延余飲其虎嘯龍蟠樓遂數

日賦此以贈

鴻齋居士 石英

絕壁數千尋、臨流山骨露、南岸與山巖、相隔纒百步、昔時老猿繫蕙蘿、爲設雲棧通兩涯、涯上樹茂遮天日、老根纏巖似騰蛇、巖下爲潭碧於藍、水勢徐轉生千渦、欲舟不可崖欲、橋奈立柱何、後人友學胡孫巧、重椽架梁備構造、橋就忽爲聚落地便是甲州一官道、我亦蠟履探秋好、阻雨客窓鎖望眺、一宵雲霧月闌閑、隔澗問山猿叫、

つられれど思ひはなるゝ人しもぞ
猿橋ばしもみねば戀しき

藻沙草

つたかつらよちて渡せしいさほより

むべ猿橋の名にや立つらん

茂 救

かけ初めて幾代經ぬらん岩かつら

昔しながらに渡る猿橋

了 性

つたかつら傳ひしまゝに習けむ

昔しをかけて渡るさるはし

徴 信

柴人も梢つたふと見ゆるかな

そはたつ山の甲斐の猿橋

盛 次

餘所にのみ聞わたりせば危さを

さやは思はん甲斐の猿橋

守 成

二柱神の尊の跡とかも

雲にかけたる甲斐の猿橋

宗 弘

ためらひて渡りかねたる白雲の

はたてにかゝる甲斐の猿橋

豊 一

立とまり見をろす谷に目もくれて

夢こゝちする甲斐の猿橋

正 興

遠方に見るたに胸のとゞろくに

渡らば如何に甲斐の猿橋

正 矩

行水のいづこはあれど桂川

名をなつかしみ月宿るらむ

橘 千 蔭

舟うけてなかむる月の桂川

夏そともなき影の涼しさ

矢 崎 好 貫

月影のさすや桂の花ちると

見しは岸うつ波にぞありける

落 合 直 澄

猿橋や蠅も居直をる笠の上
猿橋や思はず渡るにじの上
水暗く目のまふ橋や呼子鳥
猿橋や吹まとまつて氷る風
猿橋や影くるゝまで四十雀
北しぐれ欲しき小簀や橋の上
猿の手をからばや橋の螢狩
さるの橋水より雲の月近し

猿橋を見る

巖谷小波

今まで汽車の窓からのみ、幾度か瞥見し來つた猿橋を、親しく其境に臨んで見ると、名に負ふ日本三橋の一たるを認める、只恨らくは、傍に汽車の鐵橋と、水電の橋橋とが猿の物真似の愚觀を呈してゐるが、文字通り斧で刪つた様な對岸絶壁その一方には瀧を懸け、一方には洞をふくんで、前者に思出の名あり、後者は風穴と呼ばれて、共に景勝を添へて居る。更に好ましいのは、橋を護り顔の老樹の

秋は錦を飾るべき枝の間から、深く碧潭を望むあたり、正に多時の杖杖に値する
猿橋や橋より低き蟬の聲
苔の香や猿も滑らむ岩の肌
潮や猿橋に人立盡くす

(鷓五號より載)

猿橋山の中

東も西も

北も南も山ばかり。

甲州さるはし

猿がはしかけた

それは昔のことだとさ。

甲州猿橋

かつらの川は

鮎と螢で名が高い。

讀人不知

全

門瑟

葛三物

護物

相州三浦連

市井

杓水

野口雨情

全人

無名子

七、繪畫になれる猿橋

廣重の筆になれる猿橋の繪畫として原本の残れるものは頗る稀れであらう。東京松木善右衛門氏所藏にかゝる絹本の如きは珍品と云ふべきであらう。彼れは風景愛好家として又その紹介者として此地を探勝せられた事實がある。

彼が天保十二年、四十五歳の時、甲州行脚を思ひたちて、猿橋の宿にたどりついたのは四月四日のことである、彼れの旅日記の一節に



（龍所氏本松京東）橋猿本絹筆重廣

「犬目より上鳥澤まで歸り馬一里十二町乗り、鳥澤に下り猿橋まで行程二十六町の間、甲斐の山々遠近に連り、山高くして谷深く、桂川の流れ清麗なり、十歩二十歩行く間にかつらなり近村の人家まばらに見え風景たぐいなし、猿橋向ふ茶屋にて中食、やまめの焼びたし、菜びたしなり」

とある如く、猿橋を中心とせる山國の風物が如何に天才的藝術家たる廣重の氣に入りしかは、その筆致にあふれてゐるのである。

又巨摩郡南湖村出身の大森快庵先生が、嘉永年中の著書甲斐叢記十卷（一名甲斐名所圖會）のうちの第九卷、甲州道中江戸路の項に、釜石の彩筆になれる挿繪は面白く、尙又同時代黒川春村の並山日記十卷のうち卷の一に、猿橋の記事といもにその寫生畫が掲げられているが、共に原畫は相當なる繪師の筆になりしもので、彩色されたものであつたと云はれる。其他鴻齋の墨畫も残されてある。



橋猿の筆重廣

八、甲斐絹に就て

甲斐絹と云ふ文字で現されたのは明治初年の頃であつて、昔しは「改機」「海黄」「加伊岐」「海氣」等の文字で書記されていた。また今から二百年以前頃から「織色郡内」と云ふものが此地方から盛んに織出された。

之れは即ち現今の甲斐絹の前身であつて、一般には其頃「郡内」(グンナイ)と呼び



北都留郡乾菓共同販賣利用組合事務所

習はしていた。色合ひも単複とりぐで、又織方にも平も綾もあつたのである。徳川時代の末期には益々生産が盛んになつて、「郡内縞」などと呼ぶものも出来て、西京の西陣の織元までが模造品を（京郡内）製織する様になつた。彼の芝居で有名な、お七や、三勝や、半七の晴着が郡内であつたかゝ窺はれる。甲に至つては、大衆嗜好の寵兒であつたかゝ窺はれる。甲斐絹は全く他の絹織物の追従を許さざる一種獨特な着心地をもつことがその生命である。由来猿橋中心の地方は古來無地物の特産地であつたが、現今では家庭工業から工場の設備にかへられ製品も多種多様なものとなり、年産額實に九十五萬七千餘點、その價格金七百六十三萬餘圓に達する有様である。今後益々新工夫を案出して將來の大發展を期してゐる。

斯くも郡内が繊維工業の發達したのも悠久なる歴史をたどるものである。彼の延喜式主計の條の、甲斐の夏調絲の項に、中絲、二十五ヶ國の中に加えられ、又「調緋帛三十疋、紺帛六十疋、皂帛二十五疋、椶帛十疋、自餘輪絶」

などに見えるので首肯が出来る。

北都留郡乾菓共同販賣利用組合

驛の東北に聳ゆる豪華なる鐵筋コンクリートの建物にして、即ち産繭處理統制法案から生れた本縣唯一最初の存在で、猿橋町に本部を、上野原町に支部を置く。

敷地	千五百坪
總工費（支部共）	拾九萬貳千餘圓
國庫助成金	七萬四千餘圓
乾繭能力（本乾一日）	六千百貫
倉庫生繭收容量	八萬貫

九、猿橋を中心としたる名産と方言

無地、繪、縞、絞、甲斐絹、眞綿、百目柿、枯露柿、鮎、山葵漬、葡萄、木地細工、厚焼煎餅、猿饅頭、木實まんじう、岩菓子、繪馬郵便、繪葉書。



乾菓共同販賣事務所全庫

チチモナイ。

ケケル。

ケエーロ。

デンボロ。

アリンドウ。

リンリキ。

ゴツチャウ。

ハンデ。

ウラー。

イツシイ。

キピシヨウ。

コピシヨウモナイ。

ケツカアレ。

ビシヤラ。

何をコクか。

澤山、

上にのせる、

ください、

かたつむり、

蟻、

人力車、

面胴、

早く、

自分、

粗末な品、

急須、

不潔だね、

居れ、

雨がりのぬかるみ、

何を云ふか、

ウツチヤール。

ヤブセツタイ。

クネ。

フンダ。

ドケロ。

キヤアラ。

ビヤク。

ズダイ悪い。

コペエール。

ヨスン。

ダラ。

ソベエル。

ヅクドウ。

リシン。

ゲエモナイ。

捨ろ、

五月蠅、

垣根、

澤山、

退け、

桑原、

山崩れ、

極く悪い、

臆する、

四度、

下肥（糞尿）

ふざける、

濡る、

地震、

機能が無い、

昭和十一年七月十五日印刷
昭和十一年七月十九日發行
〔定價貳拾錢〕

山梨縣北郡留都橋町一三九番地

編輯者 仁 科 義 男

山梨縣北郡留都橋町原橋一九一

發行者 猿 橋 保 勝 會

山梨縣北郡留都橋町原橋一九七

印刷所 猿 橋 活 版 所

終

